

新型コロナウイルスと日本語教育 ②

リアルタイム型授業

オンライン授業といってもいろいろな形式がある。なかでも、Zoom や LINE などの TV 会議システムを使って、遠隔地においても同じ時間にネットワークを通じて集まり、授業を行う形式が代表的なものである。具体的には遠隔地にある学校で、その科目を担当する教員がいない場合など、隣町の学校の教員がインターネットを利用して映像や音声を送り、大型のスクリーンやテレビに双方の様子を映し出して、まるで同じ空間で授業を行っているようにできるものだ。こういった試みは 1990 年代中頃から実験的に行われてきた。遠隔地でも教育を受けたいというニーズがあり、それを解決するために情報通信技術が活用されてきたと言える。このメリットは「双方向性」があるために、教員と学生が対話できる点にある。音声や映像を通して双方向的にやり取りができ、同じ時間に遠隔地でも授業が受けられるのである。しかし、それは見方を変えればデメリットにもなりうる。たとえば海外の場合など、時差の関係でできないこともある。筆者も新型コロナウイルスで一時帰国後、再来日できない学生のために Zoom を使ってみたが、韓国、台湾は 1 時間の時差で問題ないものの、インドの学生の場合、午前の授業だと早朝にアクセスしてもらわなければならないということもあった。ヨーロッパやアメリカではなおさら困難である。また海外の事情として、通信ネットワーク環境の「質」が問題になることもある。

オンデマンド型授業

教育方法の柔軟性を高め、多様な学習者のニーズを満たすために、従来から通信教育が行われてきた。できるだけ学習者の自学自習が可能な環境を用意する必要があり、ラジオやテレビを利用した講座から、インターネットの普及に伴って、Web ベースのオンデマンド学習も増えてきた。インターネットを利用することで時間、空間を超えた遠隔授業が可能になり、扱えるメディアも増え、自宅での学習もこれまでに増して濃密な学習が可能になったと言える。オンデマンド型のメリットは、文字、音声、静止画、動画などを自由に扱い、学習者の動機付けを高め、興味や関心を引き付けることもでき、またモジュール化された教材を配信することにより、時間や空間の制約を受けずに自由に受講できる点である。しかし、インタラクティブ性はなく、一方通行で配信されたものを視聴し、学習していくという点はデメリットでもある。そのデメリットを補うために BBS (Bulletin Board System) を使うことも行われてきた。現在は YouTube などを利用することで、大掛かりな設備や機材を導入することなく、手軽に教員が動画を作成し、配信することも可能になり、また双方向性も補う意味で他のソフトを併用することも盛んになっている。

ハイブリッドな授業

オンライン授業には様々な形式が考えられるが、一つの形式にこだわることなくメリット・デメリットを考慮し、組み合わせながら授業を組み立てていくことができるのではないだろうか。講義形式で知識を伝達していく部分に関してはオンデマンド型で Web 上に公開し、教師が予習や復習として済ませる形にしておき、対面でインタラクティブに行いたい部分に関しては Zoom な

どを使ったリアルタイム型の授業を行っていけば、効果的な授業を行えるのではないだろうか。現在ではパソコン、Web カメラ、マイクがあり、インターネットに接続されていれば、すぐにでも授業の動画を作成することができる。パソコンは文字、音声、写真、動画などメディアを自由に扱える点で自由度が高い。具体的には PDF 化したテキストや CD・DVD 教材、パワーポイントファイルなど、使える素材を準備しておき、授業の構成を考え、準備を整えてから画面キャプチャーソフトで録画して動画を作り、あとは YouTube にアップロードすればよい。学習者には動画を視聴しておくように指示し、時間を決めて Zoom で集まる。その時にはすでに授業の内容は動画で予習しているはずなので、それを補完するようなことを行えば無駄がない。知識を小出ししていくような講義形式の授業ではなく、学習者の質問や意見をベースに討論主体のような授業を展開することもできる。つまり一方的な知識の詰め込み型授業形式ではなく、学習者と共に考え、学ぶという形式の授業になり、教師側も学習者とのリアルタイムなやり取りの中で共に学んでいくことができる。また単位の面でも通常 90 分の授業なら、オンデマンド型を 20 分 × 2 回で 40 分、リアルタイム型で 50 分やることで学生にも負担をかけずにできる。受講者側の環境を考えると、パソコンを使う学生もいればスマートフォンの小さな画面で受講している者もいる。通常の授業と違って 90 分も画面を見続けられるものではない。筆者はこのような考え方で新型コロナウイルスの影響で対面授業のできない間、オンライン授業を行ってきた。しかし、新たな問題や課題も見えてきた。

問題点や課題

安定した通信環境、またそれに伴うパケット料の問題、スマートフォンやパソコンなど不揃いの接続機器の問題、Zoom の場合、カメラ映像の停止、ノイズ除去のためのミュートなど、機器を導入した場合の授業ではある程度、ルールも決めておかないと効果的な学習は望めない。それはオンライン授業を行った教員だれもが感じていることだと思う。以前、LL やパソコンなどの機器を導入する意義について研究していたことがあるが、それらの機器を積極的に導入するのは学習効果を高めるためであり、必要性がないのに導入しては経費の無駄遣いになると考える。また機器導入で操作を覚える時間的な浪費も起こる。

しかし、今回の新型コロナウイルス禍では、従来行ってきた「授業そのもの」が機器を導入しなければ行えなくなってしまったという点で、大きな混乱が起こった。さらに言えば、普段からパソコンに慣れ親しんでいる人と、機械に対して苦手意識のある人の間で大きな溝ができたようにも思う。その溝を埋めるためにサポート体制や専門家の配置などを整えていくべきだと思うが、未曾有の事態で対応ができなかった教育機関も多かったのではないだろうか。また新聞記事で読んだが、今年大学に入学した 1 年生が入学以来、一度も登校していない、友達もできない、授業はすべてオンライン、クラブ活動もできないという学生もいる。入学以来、ずっと朝から夕方までオンライン授業でパソコンとにらめっこでは、自分はいったい何をやっているんだろうと思うのも無理はない。